

# 昼食の満足度と心理的要因に関する研究

日本工業大学 先進工学部 情報メディア工学科 丸 山 友 希 夫

## 1. はじめに

近年における日本においては、消費者の多様化するニーズや消費税の増加に関する問題から食への関心が高まりつつある。しかし、消費者が普段の昼食に満足できている環境にいるとは限らない。この昼食の満足度に関する既存研究においては、充実したランチ休憩を取らないとストレスが増加し、創造性が減退することやリラクゼーションのための時間が生産性の向上につながるものが報告されている。このように、昼食の満足度により午後の仕事効率に影響することが考えられる。そこで、本研究においては、この昼食の満足度について着目する。まず、日本における昼食の事情をみると、大きく分けて社会人、主婦、大学生、高校生以下の4つの状況が考えられる。

- ・社会人：社員食堂，職場の近隣食堂，移動販売弁当，仕出し弁当，コンビニ弁当，持参弁当，食べない
- ・主婦：手作り，自宅の近隣食堂，スーパーの惣菜，コンビニ弁当，食べない
- 大学生：学食，大学の近隣食堂，コンビニ弁当，持参弁当，食べない
- ・高校生以下：給食，持参弁当，コンビニ弁当

上述したように、社会人、主婦、大学生、高校生以下の昼食の状況は様々である。本研究においては、昼食を安定的に食していると考えられる大学生に着目をする。そして、本研究目的は、大学生が昼食に満足する要因を導出し、この要因と心理的要因との関係を導出することである。本研究

においては、次の2つについて定義する。1つ目は、普段の昼食における満足度を「理想的な昼食の満足度」と定義する。2つ目は、学食における満足度を「現実的な昼食の満足度」と定義する。そして、これら2つの昼食の満足度の差異から、大学生が昼食に満足する要因を導出する。また、心理的要因については、「5因子性格検査短縮版(FFPQ-50)」を用いる。

以下、2章において、アンケート調査結果より大学生の昼食に満足する要因を導出する。3章において、FFPQ-50の診断結果より大学生の心理的要因について導出する。4章において、導出する昼食の満足度と心理的要因との関係について導出する。

## 2. 大学生における昼食の満足度

本章において、アンケート調査結果より大学生の昼食に満足する要因について検討する。先述したように、本研究においては、理想的な昼食の満足度」と「現実的な昼食の満足度」について追究する。

### 2.1 アンケート調査概要

本節において、大学生の昼食の満足度に関するアンケート調査の概要について述べる。本研究においては、予備アンケート調査を実施し昼食を満足するキーワードを選出した。そして、選出した昼食を満足するキーワードを元に昼食の満足度に関するアンケート調査項目を作成し、これを本研究における本アンケート調査と位置付けた。本論文においては、本アンケート調査およびこの調査

から得られた分析結果等について示す。なお、予備アンケート調査から得られた昼食を満足するキーワードは、「安さ」、「店までの距離」、「ボリューム」、「接客態度」、「栄養バランス」の5つとなった。

## 2.2 本アンケート調査項目の作成

本節において、大学生の昼食の満足に関するアンケート調査項目について述べる。本研究においては、アンケート調査項目は全10問を設定した。問1から問4は、アンケート回答者の基本情報(年齢、性別など)についての調査項目である。問5以下の調査項目は次の通りである。

問5：あなたが普段昼食として食べたいものを答えて下さい(例:カレー、ハンバーグ定食、ラーメンなど)

問6：あなたはいつもの昼食に満足していますか？

問7：あなたは普段昼食で飲食店を利用する際に、次の項目(\*)についてどのくらい重視しますか？

問8：あなたは昼食で最も利用する店舗(\*)について次から1つ選んで下さい

問9：問8で選択した店舗を利用する際に、次の項目(\*)についてどのくらい重視しますか？

問10：その他、昼食について重視していることがありましたら自由に記述して下さい

問5および問7の調査項目にある“普段”とは、特に意識することがないことを意味している。つまり、単に昼食のことをさすことになる。一方で、問6の調査項目にある“いつもの”とは、実際に食している昼食のことをさしている。また、問7および問9の調査項目にある“次の事項”とは、次の通りである。

1：安さ

2：接客態度

3：栄養バランス

4：素材の安全性

5：高級感

6：立地場所

7：品揃えの豊富さ

8：クーポン

9：ボリューム

10：周りの評判

11：店の雰囲気

12：ポイントカード

そして、これらの各回答については、4者択一(とても重視する、まあまあ重視する、あまり重視しない、全然重視しない)にて回答を設定した。さらに、問8の調査項目にある“店舗”とは、日本工業大学(以後、「本学」と記述)の学生が昼食に利用する店舗等であり、次の通りである。

A：第一食堂

B：第二食堂

C：みのり寿司

D：スチューデントセンター

E：アルテリーベ

F：弁当販売(第一食堂)

G：購買

H：パン屋(購買)

I：持参弁当

J：出前

K：学外の飲食店

L：コンビニエンスストア

M：自宅

N：食べない

## 2.3 本アンケート調査の実施概要

本節において、本アンケート調査の概要について述べる。下記の通り実施した。

期間：2016年8月1日～8月30日(1ヶ月間)

方法：配布式

対象：本学の学生  
 集計：配布数：150部  
 回答数：91部（回答率：約61.7%）  
 有効回答数：85部（有効回答率：約57.8%）

本論文においては、有効回答数である85部のアンケート調査結果を元にする。

## 2.4 本アンケート調査結果（基本情報）

本節において、本アンケート調査における基本情報の結果を示す。まず、男女の内訳については、男子学生81名であり、女子学生は16名である。男子学生の割合が高くなっている。次に、年齢の内訳については、男子学生の18歳は8名、19歳は22名、20歳は18名、21歳は24名、22歳は22名、23歳は5名、24歳は1名であり、女子学生の19歳は35名、20歳は35名、21歳は24名、22歳は6名である。

## 2.5 学生における昼食に満足する要因

本節において、有効回答数である85部のアンケート調査結果を元に、因子分析を使用して本学の学生について昼食に満足する要因を導出する。ここでは、2種類の昼食に満足する要因を導出する。1つは、アンケート調査項目の問7から得られる回答結果を用いたものである。問7は、普段の昼食についての設問である。そして、この設問から得られる結果を「理想的な昼食の満足度」と仮定する。他方は、アンケート調査項目の問9から得られる回答結果を用いたものである。問9は、問8で選択した昼食で一番利用が多い店舗についての設問である。そして、この設問から得られる結果を「現実的な昼食の満足度」と仮定する。

まず、問7および問9の回答は四者択一での回答結果であるため、これらを次のように数値化する。

とても重視する : 4点  
 まあまあ重視する : 3点

あまり重視しない : 2点  
 全然重視しない : 1点

数値化した回答結果を用い、因子分析を実行する。なお、分析には株式会社日本科学技術研修所のJUSE-StatWorks/V5を用いた。

### 2.5.1 理想的な昼食の満足度の要因

本項では、理想的な昼食の満足度の要因の導出について、その推定結果を示す。表1に、問7における14項目の回答結果を用いた因子分析の結果について固有率と寄与率の一部を示し、図1にそのスクリープロットを示す。表1および図1に示すように、今回の分析においては、因子数を3と推定する。表2に因子数3で推定した因子負荷量

表1 因子分析結果の一部（理想的な昼食の満足度）

No.	固有値	寄与率	累積寄与率
1	3.076	0.256	0.256
2	1.592	0.133	0.389
3	1.422	0.119	0.507
4	1.156	0.096	0.604
5	0.962	0.08	0.684

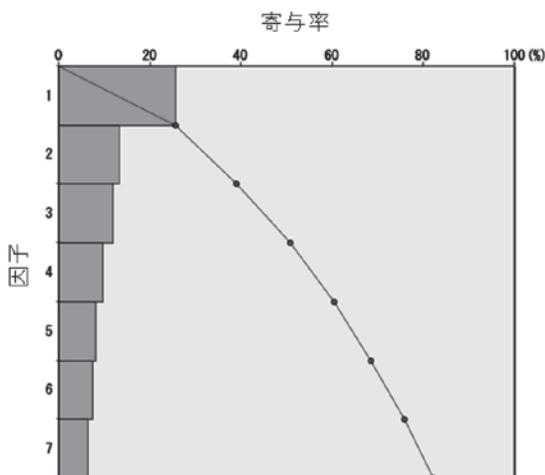


図1 スクリープロット (理想的な昼食の満足度)

を示す。この因子負荷量は、正の値は肯定的な考えであると解釈ができ、負の値は否定的な考えであると解釈ができる。表2において、太字の因子負荷量は、各設問項目における最大値であり、この因子負荷量が最大値となる因子に帰属する。表2に示すように、問7における14項目のそれぞれが、推定した3因子のいずれかに帰属する。例えば、因子1に帰属する問7における設問項目は、「4 素材の安全性」、「3 栄養バランス」および「6 立地場所」の3項目となる。そして、各因子に帰属した設問項目からキーワード等を捉え、各因子を命名する。因子1については、因子負荷量が全てマイナスであるため、今回の分析結果からは、素材の安全性を重視しない傾向があり、栄養バランスも重視しない傾向があり、立地場所についても重視しない傾向と捉えることができる。つまり、自分の思うままにすることにより、昼食に満足することが考えられる。したがって、因子1を「自由奔放」と命名する。同様に、因子2については、ポイントカードを重視する傾向があり、クーポンも重視する傾向があり、安さも重視する傾向があると捉えることができる。つまり、価格に関係するものが昼食を満足することが考えられる。したがって、因子2を「価格」と命名する。因子3については、周りの評判を重視する傾向があり、店の雰囲気も重視する傾向があり、高級感も重視する傾向があり、品揃えの豊富さも

表2 因子負荷量 (理想的な昼食の満足度)

項目番号, 内容	因子1	因子2	因子3
④素材の安全性	<b>-0.789</b>	0.049	0.132
③栄養バランス	<b>-0.568</b>	0.133	-0.021
⑥立地場所	<b>-0.421</b>	0.138	0.215
⑫ポイントカード	-0.195	<b>0.703</b>	0.135
⑧クーポン	0.053	<b>0.699</b>	0.265
①安さ	-0.079	<b>0.279</b>	-0.108
⑩周りの評判	-0.003	0.029	<b>0.736</b>
⑪店の雰囲気	-0.392	-0.167	<b>0.560</b>
⑤高級感	-0.252	0.127	<b>0.500</b>
⑦品揃えの豊富さ	-0.287	0.282	<b>0.378</b>
②接客態度	-0.248	-0.088	<b>0.367</b>
⑨ボリューム	0.045	0.118	<b>0.291</b>

重視する傾向があり、接客態度も重視する傾向があり、ボリュームも重視する傾向があると捉えることができる。つまり、昼食の内容以外について関係するものが昼食を満足にすることが考えられる。したがって、因子3を「店舗環境」と命名する。

## 2.5.2 現実的な昼食の満足度の要因

本項では、現実的な昼食の満足度の要因の導出について、その推定結果を示す。表3に、問9における14項目の回答結果を用いた因子分析の結果について固有率と寄与率の一部を示し、図2にそのスクリープロットを示す。表3および図2に示すように、今回の分析においては、因子数を3と推定する。表4に因子数3で推定した因子負荷量を示す。そして、各因子に帰属した設問項目から

表3 因子分析結果の一部 (現実的な昼食の満足度)

No.	固有値	寄与率	累積寄与率
1	4.288	0.357	0.357
2	1.252	0.104	0.462
3	0.989	0.082	0.544
4	0.942	0.078	0.623
5	0.885	0.074	0.696

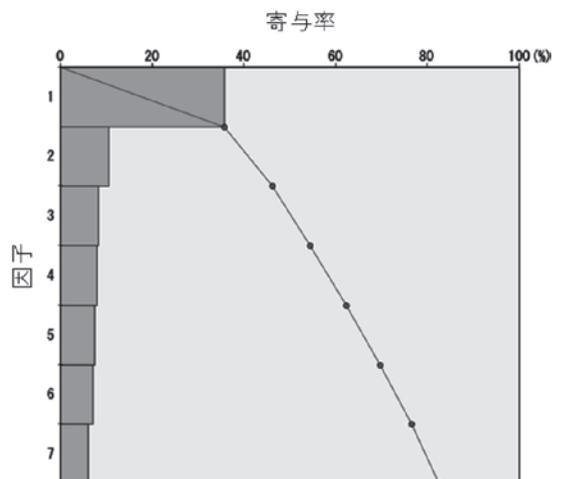


図2 スクリープロット (現実的な昼食の満足度)

表4 因子負荷量（現実的な昼食の満足度）

項目番号, 内容	因子1	因子2	因子3
⑨ボリューム	<b>0.378</b>	0.047	0.106
①安さ	<b>0.173</b>	-0.009	-0.028
⑥立地場所	0.033	<b>1.212</b>	0.203
⑫ポイントカード	-0.246	0.063	<b>0.895</b>
⑧クーポン	-0.005	0.160	<b>0.829</b>
⑩周りの評判	0.380	0.174	<b>0.584</b>
⑤高級感	0.341	0.039	<b>0.499</b>
⑪店の雰囲気	0.475	0.312	<b>0.496</b>
②接客態度	0.415	0.035	<b>0.447</b>
④素材の安全性	0.338	0.065	<b>0.431</b>
⑦品揃えの豊富さ	0.353	0.214	<b>0.391</b>
③栄養バランス	0.182	0.148	<b>0.329</b>

キーワード等を捉え、各因子を命名する。因子1については、今回の分析結果からは、ボリュームを重視する傾向があり、安さも重視する傾向と捉えることができる。つまり、コストパフォーマンスにより、昼食に満足することが考えられる。したがって、因子1を「コストパフォーマンス」と命名する。因子2については、立地場所を重視する傾向があり、つまり、利用する店舗の立地場所が昼食を満足にすることが考えられる。したがって、因子2を「立地場所」と命名する。因子3については、ポイントカードを重視する傾向があり、クーポンも重視する傾向があり、周りの評判も重視する傾向があり、店の雰囲気も重視する傾向があり、高級感も重視する傾向があり、店の雰囲気の重視する傾向があり、接客態度も重視する傾向があり、素材の安全性も重視する傾向があり、品揃えの豊富さも重視する傾向があり、栄養バランスも重視する傾向があると捉えることができる。つまり、昼食の内容以外について関係するものが昼食を満足にすることが考えられる。したがって、因子3を「店舗環境」と命名する。

### 2.5.3 理想的と現実的な昼食の満足度の差異

本項において、本学の学生について理想的な昼食に満足する要因と現実的なその差異について示す。前項までの分析結果から、今回のアンケート調査における理想的な昼食に満足する要因と現

実的なそれを表5にまとめる。表5に示すように、本学の学生については、昼食に満足する要因は理想的には自由奔放に昼食を食すことにより満足する傾向があるが、現実的（実際）には昼食のコストパフォーマンスにより満足する傾向が、今回のアンケート調査結果においては示された。

次に、アンケート調査の回答者である本学の学生一人一人について、推定した理想的な昼食に満足する3つの因子の因子得点の結果の一部を表6に示す。表中における太字の因子得点は、各学生が昼食を満足にする3つの因子の中で一番重視している因子となる。例えば、回答者21の学生について、理想的な昼食を満足する要因は、自由奔放を一番重視する傾向があり、価格を2番目に重視する傾向があり、店舗環境を3番目に重視する傾向があることを示している。また、回答者10の学生について、この回答者の因子得点は全てマイナスになっているため、全ての因子について重視していない傾向があることになる。つまり、昼食自体に重視していない傾向があると捉えられることができる。しかし、理想的な昼食を満足する要因は、3つの因子の中では自由奔放を一番重視している傾向となる。このように、学生が理想的な昼食を満足する要因は様々であることが分かる。さらに、表6に示している7名の学生について、現実的な昼食を満足する要因の因子得点を表7に示す。そして、表6および表7を比較することにより、学生の昼食に満足する要因について理想と現実の差異をみる。例えば、回答者10の学生について、先述したように理想的な昼食を満足する要因は全ての因子について重視していない傾向であったが、現実的な昼食を満足する要因はコストパフォーマンスを重視している傾向があることが分かる。また、回答者80の学生について、理想

表5 昼食に満足する要因

因子 満足度	第1	第2	第3
理想的	自由奔放	価格	店舗環境
現実的	コストパフォーマンス	立地場所	店舗環境

表6 各学生の因子得点結果の一部(理想的)

回答者	自由奔放	価格	店舗環境
21	<b>2.606</b>	<i>0.813</i>	<i>0.151</i>
10	<b>-0.473</b>	<i>-0.537</i>	<i>-1.084</i>
22	<b>1.855</b>	<i>-0.797</i>	<i>1.039</i>
40	<i>-1.437</i>	<b>2.291</b>	<i>1.444</i>
63	<i>-0.293</i>	<i>-1.58</i>	<b>0.622</b>
41	<i>-0.723</i>	<i>0.260</i>	<b>1.922</b>
80	<i>0.761</i>	<i>-0.382</i>	<b>1.748</b>

表7 各学生の因子得点結果の一部(現実的)

回答者	コスパ	立地場所	店舗環境
21	<i>-0.885</i>	<b>2.656</b>	<i>-1.172</i>
10	<b>0.648</b>	<i>-1.582</i>	<i>-0.334</i>
22	<b>-0.112</b>	<i>-0.942</i>	<i>-0.594</i>
40	<i>-0.305</i>	<i>1.026</i>	<b>3.713</b>
63	<i>-0.018</i>	<b>0.065</b>	<i>-0.664</i>
41	<b>0.86</b>	<i>-0.612</i>	<i>-0.315</i>
80	<i>-1.654</i>	<i>-1.427</i>	<b>1.547</b>

的な昼食を満足する要因は店舗環境を一番重視している傾向があり、現実的なそれも店舗環境を一番重視している傾向があることが分かる。このように、昼食を満足する要因について、理想と現実では異なる場合もあれば異なる場合もあり、心理的な要因に関連するかについて検討を試みた。

### 3. 大学生における心理的要因

本章において、本学の学生の心理的要因について検討する。これは、前章で導出した学生の昼食を満足する要因と心理的要因との関連性を検討することが目的である。心理的要因の検討については、藤島らが作成した5因子性格検査短縮版(FFPQ-50: Five-Factor Personality Questionnaire-50)を用いる。このFFPQ-50は、日本人のパーソナリティを5つの特性次元で記述しようとするものである。この5つの次元について、本質と特徴を表8に示す。表8に示すように、

表8 昼食に満足する要因

名称	本質	一般的特徴
(-)非情動性-情動性(+)	情動	情緒の安定した/敏感な
(-)内向性-外向性(+)	活動	ひかえめ/積極的
(-)自然性-統制性(+)	意志	あるがまま/目的合理的
(-)分離性-愛着性(+)	関係	自主独立的/親和的
(-)現実性-遊戯性(+)	遊び	堅実な/遊び心のある

5つの特性次元における本質が「情動」、「活動」、「意志」、「関係」および「遊び」であり、この本質について名称および一般的特徴が定義されている。例えば、本質の情動について、非情動性が強ければ情緒が安定していることを意味し、情動性が強ければ敏感であることを意味している。つまり、50問の検査項目から性格診断を行う検査である。この検査項目から抜粋していくつかの検査項目を挙げる。

- ・憂鬱になりやすい
- ・大勢でわいわい騒ぐのが好きである
- ・あまりきっちりした人間ではない
- ・人には暖かく友好的に接している
- ・美や芸術にはあまり関心がない

本研究においては、先述した昼食の満足度に関するアンケート調査に加えてFFPQ-50を同時に実施した。ただし、各検査項目に対する回答については、FFPQ-50は五者択一(よく当てはまる、まあまあ当てはまる、普通、あまり当てはまらない、全然当てはまらない)の回答方式であるが、本研究では四者択一(よく当てはまる、まあまあ当てはまる、あまり当てはまらない、全然当てはまらない)での回答方式にした。そして、各回答者の評価方法については、FFPQ-50と同様にした。本章においては、各回答者の結果については記述しない。

### 4. 昼食の満足度と心理的要因との関係

本章において、前章までに分析した結果を元に

学生について昼食を満足する要因と心理的要因との関係について検討する。この検討については、FFPQ-50における5つの本質を元に昼食を満足する要因との関係について仮説を立て、その仮説を検証する。この仮説を立てる概念を表9に示す。例えば、FFPQ-50における本質の情動が低い(表中の「情動-」)、つまり情緒が安定している学生は、自由奔放に昼食を食すこと(表中の自由奔放が「高い」)を重視するという仮説を立てる。また、FFPQ-50における本質の活動が高い(表中の「活動+」)、つまり積極的な学生は、自由奔放に昼食を食すこと(表中の自由奔放が「高い」)を重視し、店舗環境は重視しないという仮説を立てる。このように、20の仮説を立てた。なお、表中の「-」は、仮説を立てることが困難であることを意味している。

#### 4.1 仮説の検証1

本節において、仮説「情緒が安定している学生は、理想的には自由奔放に昼食を食したい」について、検証を行う。まず、FFPQ-50の検査結果から情緒が安定している(非情動性が強い)学生は15名である。でこの15名について、理想的な昼食を満足する要因ある「自由奔放(因子1)」を横軸に設定し、「価格(因子2)」を縦軸に設定し、それぞれの因子について因子得点の散布図を図3に示す。図3に示すように、理想的な昼食に満足する要因の自由奔放を重視するか否かについては、自由奔放の因子得点が点在し、今回の分析結果からは特徴は見出すことはできない。した

表9 仮説の概念

本質	自由奔放	価格	コスバ	立地場所	店舗環境
情動-	高い	-	-	-	-
情動+	高い	-	-	-	-
活動-	低い	-	-	-	高い
活動+	高い	-	-	-	低い
意志-	-	-	-	-	-
意志+	高い	-	高い	高い	高い
関係-	高い	-	-	高い	高い
関係+	高い	-	-	-	-
遊び-	高い	高い	高い	高い	高い
遊び+	高い	-	-	-	-

がって、この仮説については、成立しない。

#### 4.2 仮説の再考

昼食を満足する要因と心理的要因との関係について、前節における検証結果から仮説が成立しないため、本節において仮説を再考する。そこで、FFPQ-50における本質について、方向性が同じものの本質を組み合わせた。その組み合わせを表10に示す。表10に示すように、例えば、本質(-)の組み合わせにある「非情動内向」は、情緒が安定しひかえめな性格を意味する。そして、これらの本質の組み合わせについて、昼食を満足する要因と心理的要因との関係について検討する。次節において、仮説が成立したものを示す。

#### 4.3 仮説の検証2

本節において、仮説「敏感で親和的な学生は、現実的に店舗環境を重視しない」について、検証を行う。まず、FFPQ-50の検査結果から敏感(情動性が強い)で親和的(愛着性が強い)な学生は11名である。この11名について、現実的な昼食を満足する要因である「立地場所(因子2)」を横軸に設定し、「店舗環境(因子3)」を縦軸に設定し、それぞれの因子について因子得点の散布図を図4に示す。図4に示すように、現実的な昼食に満足する要因の店舗環境の因子得点の大部分がマイナスとなり、今回の分析結果から店舗環境を

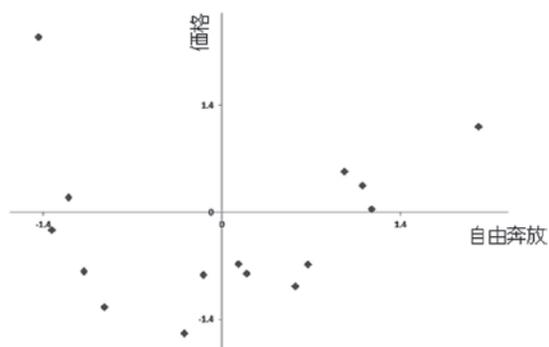


図3 情緒安定な学生における自由奔放と価格の関係

表 10 5つの特性次元における本質の組み合わせ

本質 (-) の組み合わせ	本質 (+) の組み合わせ
非情動内向	情動外向
非情動自然	情動統制
非情動分離	情動愛着
非情動現実	情動遊戯
内向自然	外向統制
内向分離	外向愛着
内向現実	外向遊戯
自然分離	統制愛着
自然現実	統制遊戯
分離現実	愛着遊戯

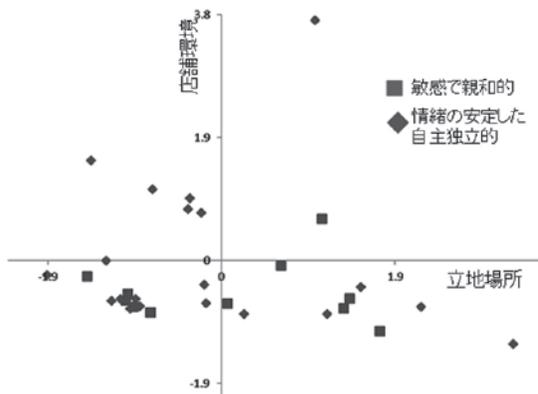


図 4 敏感で親和的な学生における立地場所と店舗環境の関係

重視していない傾向を示している。したがって、今回の分析結果より、この仮説は成立する。

なお、この店舗環境は、理想的な昼食を満足する要因における第3因子でもある。そこで、仮説「敏感で親和的な学生は、理想的に店舗環境を重視しない」について検証を行ったが、この仮説は成立しなかった。

### 5. おわりに

本論文において、大学生が昼食に満足する要因を導出し、この要因と心理的要因との関係を導出することを目的とした。まず、昼食の満足度についてのアンケート調査項目を作成し、本学の学生を対象にアンケート調査を実施した。このアンケート調査と共に学生の心理的要因を調査するた

めに、FFPQ-50の検査も実施した。得られたアンケート調査結果を元に因子分析により理想的な昼食を満足する要因および現実的なそれをそれぞれ3因子推定した。理想的な昼食を満足する要因については、「自由奔放」、「価格」および「店舗環境」と命名した。また、現実的な昼食を満足する要因については、「コストパフォーマンス」、「立地場所」および「店舗環境」と命名した。更に、昼食の満足度と心理的要因との関連性について検討を行った。今回の検討結果から、次の仮説が成立した。

- ・敏感で親和的な学生は、現実的に店舗環境を重視しない

また、本論文では他の検討について記述していないが、理想的な昼食を満足する要因と現実的なその差異についての仮説検証において、次の4つの仮説が成立した。

- ・現実的な昼食において「コストパフォーマンス」、「立地場所」および「店舗環境」を重視しない学生は、理想的な昼食において自由奔放を重視する
- ・現実的な昼食において持参弁当を食している学生は、現実的な昼食において「立地場所」および「店舗環境」を重視しない
- ・現実的な昼食において学食で昼食を食している学生の中で「店舗環境」を重視しない学生は、理想的な昼食において「価格」を重視しない
- ・現実的な昼食において学食で昼食を食している学生の中で「店舗環境」を重視する学生は、理想的な昼食において「価格」を重視する

今後の課題については、学生が昼食で利用する店舗による昼食で満足する要因の差異や学生の所属学科による昼食で満足する要因の差異などが挙げられる。

参考文献

- [1] 藤島寛, 山田尚子, 辻平治郎:「5因子性格検査短縮版 (FFPQ-50) の作成」, パーソナリティ研究, Vol.13, No. 2, pp231-241. (2005)
- [2] FFPQ 研究会:「改訂 FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル」, 北大路書房. (2002)

謝辞

大場允晶教授, 長い間おつかれさまでした。また, 産業経営研究所および経済科学研究所におい

て複数の共同研究に参画させて頂き誠に感謝しております。本論文は, 2006年4月1日から2008年3月31日に参画させて頂きました産業経営研究所における「消費者の店舗選択要因と店舗集積評価指標に関する調査研究」にて培った研究手法を応用したものとなります。今回は, このような機会を与えて頂き誠にありがとうございました。今後におかれましては, お体には十分過ぎるくらいご留意くださいますようお願い申し上げます。そして, 引き続きご指導のほどよろしく願い申し上げます。